

月刊

2016

4  
月号

# みんなぱく

特集

# 体育会系

体育会という日本文化を考える

瀬戸邦弘

黒帯のムラ社会

溝口紀子

師弟を結ぶもの、分かちもの

小林貴幸

共同体を支えるもの

窪田暁

汗は嘘をつかない

萩原卓也

「二石四鳥のスポーツ」の会

檉永真佐夫

自ら判断する個人の集合

南真木人



# 体育会系少女たちへの賛辞

増田 俊也

プロフィール  
1965年愛知県生まれ。作家、北海道  
大学中退。2006年「シャドウ・イン  
グマの森（宝島社）で」のミステリー  
がすいじい」大賞優秀賞受賞。2012  
年「木村政彦はなぜ力道山を殺さなかつ  
たのか（新潮社）で大宅壮一ノンフィク  
ション賞と新潮ドキュメント賞をダブル  
受賞。他著に「七帝柔道記」（角川書店）  
など多数。

北海道大学柔道部時代の自伝的小説『七帝柔道記』（角川書店）を上梓して以来、スポーツ教育現場からときどきコメントを求められるようになった。

この小説は、旧七帝大（北大・東北大・東大・名大・京大・阪大・九大）だけに伝わる寝技中心の特異な柔道（七帝柔道）に、学業を放擲（ほうてき）してのめりこむ青年たちの日々の練習ぶりを、これでもかと描いている。そのリアルさが現場の先生方に驚きをもつて迎えられたのだ。国内外を問わずこれまでのスポーツ小説はすべて試合での戦いばかりが中心に描かれていた。そこに体育会出身の私は違和感を感じていたのだ。

中学でも高校でも大学でも、運動部員たちはそのほとんどを長時間のハードなルーティン練習に費やしている。『七帝柔道記』でいえば七帝戦は年に二回、二日間行われるだけで、一年のうち三百六十三日は、毎日毎日苦しみながら練習漬けの日々を送っている。正直言って、試合は一年のうちで最も楽な二日間だった。その二日間で二、三回しか戦わなくていいから。日々の練習ではたとえ年に何度も何度もある合宿で朝六時から延々と数時間の乱取り（スパリーング）、午後から多くの練習試合を繰り返して、夜はまたいつ終わるとも知れぬ乱取りを数時間、歯を食い

しばつてこなしていた。合宿中だけでなく、普段の通常練習でも毎日体重が六キロも七キロも落ちるほどの過酷さだった。

七帝柔道だけではない。どこの地方の中学野球部員でも高校サッカー部員でもみな同じである。私たち大人が冷暖房の効いた部屋で快適に過ごしている今この時間にも、全国数万校の運動部で毎日朝晩数時間に及ぶ体力ぎりぎりの練習が続けられている。

こういった非合理的ともいえる苛烈な学校運動部カルチャーは、実は日本独特のものである。西洋ではもっと合理的な練習が何十年も前に定着し、国内でさえこのカルチャーは時に非難されるようになってきた。しかし私は一概にそのような生活をすべて否定することはできないのだ。それは、卒業して大人になり、中年になり、さらに老境にさしかかると足腰がおぼつかなくなつた今も、仲間たちとのあの部生活の想い出は色褪（せ）せるどころか日々輝きを増し、渴いた心に果実を落とし続けてくれるからである。夕方散歩していると、ときどき近くの中学や高校の泥まみれのユニフォームを着た少女たちとすれ違う。彼らは練習で疲れきっているのに、知らない初老の私にも例外なく「こんにちは」と挨拶してくれる。そんなとき私は、彼らに心からの賛辞をこめて笑顔を返すのである。

- 10 ○○してみました世界のフィールド  
「うみうのウッティー」が教えてくれたこと  
卯田 宗平
- 12 みんなく Information
- 14 味の根っこ  
ハーニングー  
深山 直子
- 16 文化遺産おもてうら  
海を越える「円楼」  
河合 洋尚
- 18 手芸考  
余剰からうみだされる造形物  
——手芸について考える  
上羽 陽子
- 20 ながなんちゃ  
題名だって悩んで決めるし  
吉岡 乾
- 21 次号予告・編集後記

- 1 エッセイ 千字文  
体育会系少女たちへの賛辞  
増田 俊也
- 特集 体育会系
- 2 体育会という日本文化を考える  
瀬戸 邦弘
- 4 黒帯のムラ社会——白線黒帯にみる男と女の境界線  
溝口 紀子
- 5 師弟を結ぶもの、分かつもの——台湾の空手社会  
小林 真幸
- 6 共同体を支えるもの  
窪田 暁
- 7 汗は嘘をつかない  
萩原 卓也
- 8 「一石四鳥のスポーツ」の会  
櫻永 真佐夫
- 9 自ら判断する個人の集合——山岳部  
南 真木人

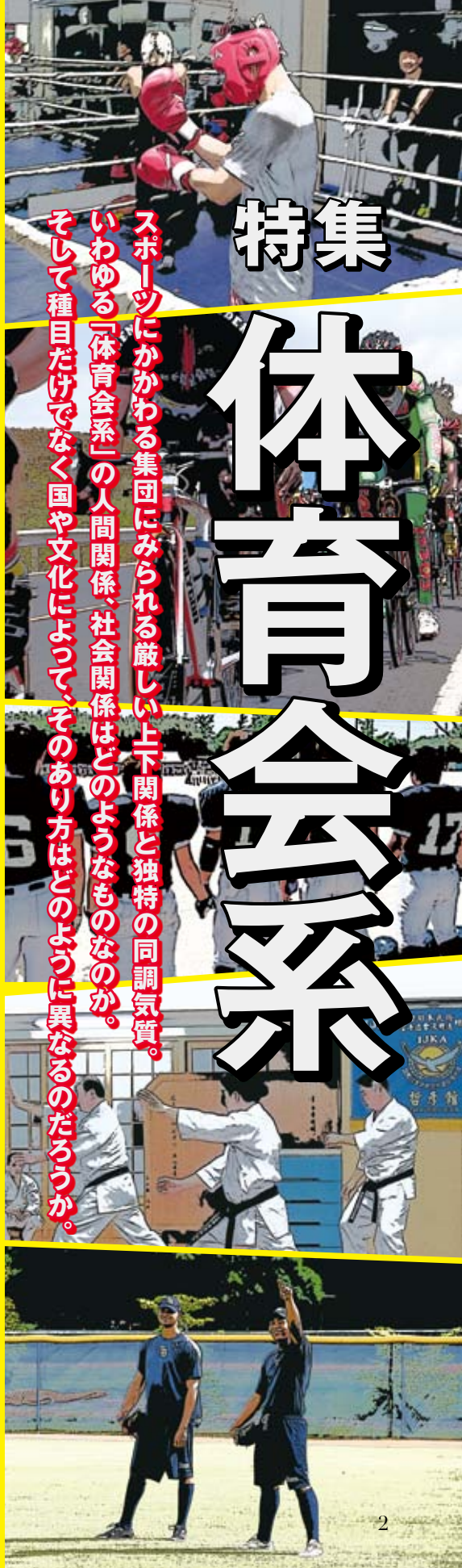
月刊  
みんなく

4月号目次

特集

# 体育会系

スポーツにかかわる集団にみられる厳しい上下関係と独特の同調気質。いわゆる「体育会系」の人間関係、社会関係はどのようなものなのか。そして種目だけでなく国や文化によって、そのあり方はどのように異なるのだろうか。



## 体育会という 日本文化を考える

瀬戸 邦弘 鳥取大学准教授

表象としての体育会(系)

「体育会(系)」。この不思議なことは、特に就職活動や会社組織などにおいてよく用いられるが、この場合、「大学の体育会運動部出身者とその性質」を指すことになる。彼らは「体力があり、打たれ強い」「上下関係がしっかりしている」などと評され、組織の良き戦力として期待されることになる。一方で、このことには「馬力だけはある」「単純で使いやすい」など彼らを使い減りしない

便利な存在として揶揄する意味合いも含まれる。いずれにしても、良くも悪くも「体育会(系)」というカテゴリーが日本社会に存在し、常に注目されていることに間違いはない。「体育会(系)」とはいったいどのようなものなのだろうか。

世界基準の価値と日本人の理想

一般的に「スポーツ」ということは、オリンピックやワールドカップなど国際大会を頂点とする枠組みにあるものを指す。これらは世界共通のルールに基づく二元的な広がりであり、国際スポーツともよばれる。

ところで、そもそも我が国においてスポーツは明治期に輸入された外来文化のひとつであり、「近代的身体」をおしてあらたな価値を伝えるツールとして重要な役割を果たしてきた。現在でもそれらはポーターレスな国際社会で共有される理想

る。一見不合理に見えるそれらは、じつは「祭祀集団」ともいえるコミュニティ形成のために必要ないわば儀礼となるのである。

「理外の理」としてのスポーツ

スポーツライター藤島大は早稲田スポーツの系譜を評して「理外の理」ということばを用いたがこれは言い得て妙である。

早稲田大学競走部の名将中村清は、ときに練習場の砂を食みながら力説するなど、伝説的指導法で有名であるが、それは彼なりの必然性が導き出した方法なのかもしれない。一見すると中村の指導法は科学的合理性から外れ、破天荒なものとして映るかもしれないが、じつは彼は科学知(エビデンス)に基づく最新のスポーツ指導法を誰よりも研究していた人物でもある。つまり、彼は科学知の有効性を理解しながらも、早稲田スポーツという日本独自の学生スポーツ文化形成のために必要な「合理性」を紡ごうとしていたことになる。ところで「理外の理」を体現するのは何も選手や指導者ばかりではない。例えば、学生応援団なども一見すると合理的でない練習や所作を墨守し、時代錯誤などと揶揄されることも多い。しかし、そこにはやはり彼らなりの「理」が存在し、必要な活動が実践されることになる。荒唐無稽な日々の鍛錬はすべて、応援団文化のための「修業」なのである。

近代日本の記憶

ところで、興味深いことに、じつは「体育会(系)」を必要とする実社会の側も「泥臭さ」や「粘り強さ」など体育会で形成される資質を学生の内に求めて

である「健全、健康、平等、平和」などを具現化する任を期待されている。すなわち、スポーツとは常に社会の理想を実現するための希望を託される存在ともいえる。また、それらは世界基準の価値



負けられないライバル対決。アメフトの試合前(於：上智大学・南山大学総合対抗運動競技大会)

おり、それは、古くからの企業文化や社会全体のあり方と体育会の親和性が高い事を意味している。またその親和性の高さは社会全体にも言え、例えば、各種メディアも体育会文化を常に注目し、それらは重要なコンテンツとして利用されている。

昭和の「スボ魂アニメ」然り、また、現在では正月の風物詩として定着している「箱根駅伝」のテレビ放映もその典型といえる。「箱根駅伝」では、画面に映るランナーとOBたちとの心の繋がりや、部員間で共有される思い、そして各選手を中心として同心円状に広がる家族や地元の仲間との「絆」が強調され、その中心にいつも伝統で繋がる「禪」が配される構図が巧みに用意されている。正月という日本の伝統的風景のなか、日本人の集合的記憶と巧みに結びつけられた体育会的世界観が、よき日本の伝統世界として消費されているのである。このように、近代以降の日本や日本人を形成する途次で体育会文化はある意味で大きな役割を果たしてきたともいえる。そう考えると、体育会自体がまさにひとつの日本文化であり、体育会の系譜とはまさに近代日本の記憶ともいえるだろう。



上智大学応援団の夜間練習風景



東京六大学野球春季リーグ戦応援風景(提供・早稲田大学応援部)

## 黒帯のムラ社会

—白線黒帯びる男と女の境界線

溝口 紀子 みぞぐち のりこ 静岡文化芸術大学准教授

今年八月、第三回リオデジャネイロ五輪が開催される。日本柔道にとって、三年前に女子柔道強化選手による暴力告発問題から端を発したクライシス以降、初めて迎える五輪。「本家」の日本チームの活躍は今まで以上に注目されている。

ここでは「本家」の伝統を受け継ぐ日本柔道のなかでなぜ「暴力文化」を容認してきたのか、その独特な規律や文化を考えてみたい。

## 頂点に立つ者は

日本の柔道の特徴として、段位制度（黒帯／赤帯）、嘉納治五郎思想、白線黒帯（女子柔道）の三つがあげられる。

まず、段位制度とは、初段から十段までと競技成績だけではなく、形の試験、修行年数、競技成績などによって昇段するシステムである。修行年数が長い高齢者に与えられる赤帯を頂点に独自のヒエラルキーが存在する。上意下達の社会では高段者を「先生」とよび、同門の先輩には「先輩」と敬称を使用し異敬の念をもたなければならぬ。一方、競技生活は修行とみなされ、選手は指導者や競技団体の幹部からのさまざまな暴力やハラメントを受容し耐え忍ぶ。現代においても旧態依然の階級社会が柔道界には存在していたといってもいい。

この独特な階級制度の頂点に在るのが講道館柔道の創始者、嘉納治五郎である。嘉納は「日本のクーベルタン」といわれ、日本近代スポーツの父であり、教育者、政治家でもある。ちなみに嘉納は「無段」である。その理由は仄聞したところによると創始者である嘉納は、頂点に君臨するの段を与えられるのではなく、与える立場であるからといわれている。この嘉納の思想「精力善用自他共栄」こそが、段位制度の中心であり、今日の柔道の崇高な哲学として継承されている。

それではなぜ嘉納の思想のもとで体罰が横行していたのだろうか。嘉納が掲げた「精力善用自他共栄」の理念の内的必然性は、自己制御された精力を善用（恩返し）することで、超越的師弟関係を築き自他共栄（ファミリーの繁栄）を導くというものである。とはいえそれは、内部において融和的であるが、外部の社会においては閉鎖的、閉性ももち合わせている。段位制度という序列社会のなかで、超越的師弟関係を築かれ上意下達の物申せないなかで、暴力は容認され、さらに勝利（金×タル）至上主義によって受容されていた。

## 横たわる白線

冒頭の女子柔道選手らへの暴力事件のように、かねてより暴力は常態化していた。とりわけ柔道

界では圧倒的に男性優位であり、女性は常に弱者であり異端者でもあった。その象徴が白線黒帯である。女性は、男性とは異なる別の段位制度におかれ白線の入った黒帯を締めなければいけない。それは男の階級社会との境界線という寓意を含んだ線でもある。

## ムラよ開け

閉鎖的な組織（ムラ社会）では、「見ざる、聞かざる、言わざる」が習慣し問題を顕在化せず隠蔽しようとする傾向がある。とりわけスポーツ競技団体は序列意識が強く団結力の強い集団であるから閉鎖的になり易い。

このムラ社会を打破するためには、その逆の手法で、見せる（可視化）、聞く（傾聴）、発言する（言語化）を、組織のなかで日常的に実践していくことである。そのことによって、組織の自浄能力が高められるのではないだろうか。これは昨今の企業や公益団体などの不祥事から垣間見えるように、スポーツ界だけでなく現代社会でも同様に見えるのではないだろうか。



日本人女性だけが身に付ける白線黒帯。著書『性と柔——女子柔道史から問う』河出ブックスの表紙。

## 師弟を結ぶもの、分かつもの

—台湾の空手社会

## 台湾の空手会派

台湾の空手は、一九六二年、台湾人の武術指導者と日本人の空手指導者が協働して、空手道場を開設したことに始まる。一九七二年には、両名の尽力で公益法人の競技団体が認可されている。こうした経緯から、現在の台湾の空手指導者の約九割が、両名の系譜に連なるといわれる。空手社会では、こうした同じ系譜に連なる人ひとが集まってつくる活動団体を会派とよぶ。台湾では、一会場一會派、一指導者一會派といった小會派が林立し、大きな會派でも指導者は数名程度だ。空手人口が違つから単純に比較できないが、日本では、指導者が数百名を超える大きな會派が多数ある。独立する指導者は、「のれん分け」してらつて、會派に留まることが多いからだ。

## 師弟関係と葛藤

台湾には、「拝師」という伝統的な規範がある。師弟を父子とみなし、弟子が師への忠節を守るといふものだ。ただし台湾の空手指導者たちは、そうした規範には、さほど意味がないという。台湾では、空手に限らず弟子の独立の気風が高いとされる。一方、師は弟子の独立をよしとしない気風もある。だから弟子の独立には、葛藤を伴うことがままある。台湾の空手社会で小會派が林立しているのは、弟子が独立に際して、「のれん分け」してらつて會派に留まることより、まったくの独立を望んで、葛藤を経たか、あるいはそれを避けようとして、師と袂を分かつことが多いからだ。師弟関係は、もともとこうした葛藤をはらんでいるから、「拝師」は、



台湾の空手道場にて。左から6番目が筆者

さほど意味がないということになる。

こうした葛藤を避けるための伝統的な慣行がある。「留一手」といい、「弟子の離反を防ぎ、今いる弟子を引き留め、あらたな弟子を得るために、師の技の奥行きを不鮮明にする」ことだ。師が拝され続けるためには、技を秘匿しなければならぬのだ。

小林 貴幸 こばやし たかゆき 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所  
シニア・フェロー

## 結び、分かつもの

数年前、台湾のある名門道場で大切に育てられた指導員が、首席師範に無断で、日本の空手会派に移籍して道場を開き、その日本の会派を巻き込んだ騒動をおこした。指導員は、かねてから独立を希望していたが、首席師範が独立を許さず、かえつて「留一手」によって技を教えてもらえないことになった。そこで首席師範に無断で移籍・独立したのだという。首席師範は、「留一手」を公言し、伝統的な規範をもち出して、弟子筋や関係者に通知した。だが、人びとと当事者二名との関係は、以前と変わらず、かえつて指導員は、競技団体であらたな役職を得ている。日本の空手社会であれば、第三者の目が厳しいから、師弟のどちらかが村八分になったり、競技団体から干されたりしているところだろう。

台湾人のある空手指導者は、「拝師」の規範は、守らなければならぬ。そのためには「留一手」が必要な場合もある。でも独立したいという個人の希望も大切だし、周りもそれを認めてくれる」といふ。「拝師」や「留一手」は、師弟を結び、また分かつ。周りの人びとも含めたそれらの意味から、台湾の社会関係が見えてくる。



上下関係とは無縁なドミニカの選手たち。ドミニカ共和国のタンパベイ・レイズのアカデミーにて



同室の選手の脈をさる。ドミニカ共和国のタンパベイ・レイズのアカデミーにて

# 共同体を支えるもの

窪田 暁 奈良県立大学専任講師

ないだろうか。勝利至上主義に立てば、部員間の統制の乱れは、チームプレーが重視される競技のマイナスイメージとして働きかねない。そのため、日ごろから監督を頂点とした命令系統を部員全体に徹底させる必要がある、上下関係というルールがその役割をこなしてきたのである。そこには、こうした経験をおして社会性を身につけていくのだという思想が存在し、長らく教育現場におけるアマチュア野球を支えてきた。そして、ここで培われた精神性がプロ野球界にも引き継がれているのである。

## 究極のプロフェッショナルリズム

一方で、海外の野球強豪国には日本の体育会系にあたるものがない。ドミニカ共和国は、アメリカの大リーグにもっとも多くの選手を送り出す国として知られているが、その秘密は、大リーグ全三〇球団が設置するベースボールアカデミーにある。スカウトが才能のある少年を発掘し、球団の基準にあった選手だけをアメリカに送り出しているのである。アカデミーには、一七〜二一歳までの選手が四〇名ほど在籍している。四人一室のドミトリで寝泊まりし、一緒に食事をして、練習する。全寮制の野球部と同じである。にもかかわらず、そこに「擬似共同体」が生まれることはない。

それはすべての選手がプロ契約をむすんでいることと関係する。大リーガーになるのが最終目標である彼らにとつて、アカデミー内の規律や社会関係は意味をもたない。それよりも個人として成功を勝ちとり、出身地の「共同体」を養っていかねばならないと考えているからである。まさに、「プロフェッショナルリズム」の極致ともいえるべきであろう。

日本社会には「あの人は体育会系だ」という言いかたがある。礼儀正しい人、辛抱強い人という意味で使われる一方で、年齢をはじめとした上下関係に固執する人という否定的なニュアンスで使われることもある。ひよっとしたら、その矛先は、体育会系に宿るアマチュアリズムが醸した「いやな感じ」に向けられているのかもしれない。

## 体育会のしきたり

わたしが体育会系の洗礼を受けたのは中学生のときである。野球部の監督に体育大学を卒業したたの教員が就任し、練習初日に「来週までに全員、丸刈りにしてこい」とのたまったのである。「丸刈りにしてもホームランを打てるようにはならないのでは？」との反論は無視され、最後まで抵抗した数名の部員にレギュラーの座があたえられることはなかった。

大学であれ高校であれ、私立の強豪校では全寮制が一般的である。寝食をともにすることで、礼儀作法をとおして上下関係を学んでいく。あいさつにはじまり、ことばづかい、食事や入浴の順番、トイレ掃除から使いつぱしりにいたるまで……。しかし、こうした閉ざされた「共同体」における上下関係がエスカレートすると、ときに上級生から下級生への体罰というかたちに変質することもある。

かくも理不尽な習慣がなくならないのは、目先の勝敗にこだわるためでは

# 汗は嘘をつかない

萩原 卓也 日本学術振興会特別研究員（京都大学）

## ケニアで自転車競技？

野生の王国、マサイ族、マラソン選手。「ケニア」と聞いて、みなさんは何を思い浮かべるだろうか。ケニアは首都ナイロビ郊外に、自転車競技選手育成を目的とする団体がある。

ここでいう自転車競技とは、細いタイヤの自転車公道をさつそつと駆け抜ける競うスポーツのことである。そこでは、地元若者一五人がトタンで作られた長屋で共同生活を営み、自転車競技選手として生き延びようと奮闘している。

## 賞金のために、生活のために

ケニア国内の失業率は日本では想像できないほど高い。日本円にして一日数百円を稼げる建設現場で雇ってもらい、その日暮らしができればまだよい。

この団体に所属する若者は自転車の修理工として日銭を稼いでいるが、彼らが喉から手が出るほどほしいのは、各大会で成績優秀者に与えられる賞金である。賞金はときに十数万円。自転車レースはチームの戦略がものをいうが、この団体は賞金をチーム内で分配しないため、賞金は獲得した選手個人のポケットに入る。彼らは大金のかかった試合の前ほど、わかりやすく目の色を変えて練習に励む。



ケニアにおける自転車レースの様子

しかし、同じように努力したからといって、誰もがみんな勝てるわけではない。運もある。なぜあいつだけ！あいつは傲慢だ！自然と不満や嫉妬が蓄積されていく。お金に振り回され、チームメイトとのぎくしゃくした関係のなかで流れる彼らの汗は、なにか濁っているようにわたしの眼に映っていた。

## 一緒に走って、一緒に疲れて

たがいに不満や嫉妬が絶えないにもかかわらず、不思議とチームの分裂には至らない。事実、この団体は地域に根ざして二〇年以上も活動を続けることができている。では、何がそうさせているのか。その手がかりは、一緒に走って一緒に疲れるという、一見些細な出来事にありそつだ。

持久力を競うという自転車競技の性質上、練習は一日一〇キロメートル前後を走る。練習中は、縦二列の集団走行が基本である。自転車は平地での巡航速度が速いため、集団の先頭を走る人は強烈な風圧を受けることになる。同じ人が先頭で力

を消耗してしまわないために、先頭を順々に交代することで負担を分担する。これは相補的かつ協力的な関係性を彼らに要求する。また、練習後は疲労にまかせ、みんなで一緒に寝転がって、そうするほかどうしようもない身体を休ませる。

本来であれば個人的な出来事と思われがちな「疲れる」という現象が、みんなの出来事として身体に沈みこみ、そして共有されていく。この積み重ねが、彼らを自転車競技団体の一員としてそこにまともな要因ではないだろうか。

彼らは特定の個人について不満を語ったあと、決まってこう付け加える。「でも彼は悪い人じゃない」。不満も嫉妬もある、それでもともに生きていく。彼らはまさに身体をおして、彼らなりの仕方、隣にいる他者の存在を了解しているようであった。汗は嘘をつかない。濁っていたのは、「アスリートはこうあるべき」というわたしのまなざしのほうだったか。彼らは今日もペダルを回し続ける、流れる汗を肌光らせながら。



修理をしながら世間話をする選手たち

## 「二石四鳥のスポーツ」の会

梶永真佐夫 民博研究戦略センター

体育会系？

ケンカに強くなりたかった。しかし、社会に飼いやられる前は、周囲に合わせるのが苦手で、頭ごなしに命令されると反発した。体育会に置く身はなく、結果的にボクシングジムにたどりついた。そもそもボクシングジムでは、練習を開始する時間、終わる時間、練習のメニューなど十人十色である。ロードワークや補強運動も各人に任されている。また体重を意識することもあり、ジム生同士が食事などに行くことも少ない。したがって、集団行動を旨とした、学年や年齢の上下に基づく厳格な秩序は醸成されにくい。実際、集団行動の苦手なジム生も少なくない。目的のための訓練には我慢できても、集団本位の規律には我慢できない人が多いのかもしれない。

合同練習か個人練習か

プロボクシングジムの場合、クラブオーナーとしての会長がトップにいる。かつてジムは拳闘会と称されたからである。その下にマネージャーがいて、契約関係に基づいてプロボクサーを監督し試合を組む。マネージャーと契約したトレーナーがジム生の練習を指導する。プロボクサーのみならず、すべてのジム生にとってトレーナーとの相性は重要である。いっぽう、練習時間が重ならない

いジム生とはなかなかつながりようがない。

もちろん例外もある。たとえばガッツ石松をはじめ五人の世界チャンピオンを輩出した名門ヨネクラボクシングジムには、高校や大学などアマチュアボクシングの部活動と同様に、合同練習の伝統がある。その長所は、技術、練習法、知識、マナーが先輩から後輩へ連綿として受け継がれ、また熟練に応じてトレーナーとしての技術も自然



大正13(1924)年にできた現存日本最古のボクシングジム「東拳ボクシングジム(東京拳闘会)」

に身につけられることである。いっぽう個人練習だと、パンチ力でもスピードでもスタミナでもディフェンスでも手数でも打たれ強さでも肝っ玉でもなんでもいい、自分の武器を磨くことに腐心できる。

「神聖な」リング

日本最初のボクシングジムは、明治二九(一九〇六)年にアメリカでの武者修行から戻った斎藤虎之助とジエムス北条が横浜に開いた「メリケン練習所」とされる。「日本ボクシングの父」といわれる渡辺勇次郎(一八八九―一九五六)も、やはりアメリカで一五年におよぶ武者修行を積んだ。大正二〇(一九二二)年に帰国して「ボクシングは体育、精神作興、国際親善、外貨獲得と二石四鳥の国家的スポーツである」とうそぶき、日本拳闘倶楽部を創設した。現在のプロ、アマ両組織の祖である。

草創期のボクシングジムのモデルはアメリカにあったろう。だが、いきおい日本独自の特徴も付随した。戦後あたりまでボクシング界でも師範や道場などのことはが通用していた。また、力道山の招聘で来日し、その後六人の世界チャンピオンを育て上げた名伯楽エディ・タウンゼント(一九一四―一九八八)が嘆き呆れたように、教育的指導の名の下に竹刀も多くのジムにあった。伝統武道の道場に擬された「神聖な」リングに対してお辞儀をしてからリングを出入りするジムは、今もある。礼とあいさつは、かならず重んじられているのである。

## 自ら判断する個人の集合―山岳部

南真木人 民博研究戦略センター

ヒマラヤ行きの「洗礼」

学生時代、地方国立大学の体育会山岳部に入っていた。どの大学山岳部も似たようなものだと思うが、山に明け暮れ、年に一〇〇日以上は山にいた。在学した五年間、ついに学園祭なるものを見ることもなく、休みといえ山に出かけ、その先にヒマラヤの高所登山を夢見ていた。

一九八〇年代当時、ヒマラヤ登山は完全に大衆化した時代に入っており、地方の大学山岳部においても既に海外遠征を経験した上級生やOBが数多くいた。膨大な山岳書や最新の海外登山



五竜岳から鷲岳を望む。親不知まで縦走中(1984年)

ジャーナルをもとに、未踏の山や遠征について熱く語るOB、大学山岳部のあいだで交換し合い蓄積された登山計画書や報告書など、山岳部とは登山に係る社会資本をもち、継承する母体だった。山行における登山技術の伝授はもとより、部歌や山の歌を引き継がせ、高所への情熱と経験に浸潤させることが、体育会山岳部ならではの伝統だった。なかでも、入学間もないわたしにとって「洗礼」のような通過儀礼と感じられたのは、カセットテープのクルアーンが流れ、香が焚かれた妖しいOBの部屋で、インド式のチキンカリーを手で食べることだった。まだ見ぬ、憧れのネパールやパキスタンがぐっと身近に感じられ、いよいよ山岳書を読み漁ったものだ。

個を重視する集団

大学山岳部の登山は、山行のリーダーに統率された団体スポーツのように映るかもしれない。だが、登山の基本は個人の判断と責任にある。ときには生命の危険と隣り合わせになる登山では、暗黙の裡に、冬山合宿への参加においても無理強いされず、自発性が重んじられた。そのため女性も入部でき、個人の能力と欲求に見合う活動が許される緩さもあつた。他方、入学年に基づく上下関

係は、大学のゼミに見られるくらいにはあつた。だが、背負う荷物の重さは平等で、一通りの経験をした二〜三年生にもなると、山行に対して意見や提案が出せる風通しの良さがあつた。

海外遠征においても、たとえ固定ロープを張りキャンブを延ばしていく旧来の「極地法」を採用しても、一握りの選ばれた登頂者のために、他の人は献身的に荷揚げに徹するといった、かつてのような発想はもはやなかった。個人が駒としてではなく、自発的かつ主体的に登山にかかわることが当然視されていたのである。逆にいえば、団体スポーツが得手ではない、悪くいえば気儘な、良くいえば個性的な個人が寄り集まり、目的と活動をシェアしているのが体育会系の山岳部だった。

「未知の地域に道を求め、未踏の高峰を目指して着々と準備を整え、遂に目的を実現するに至る全過程は、学問の研究によって新しい知識が確立される過程に実によく似ている」(一九八〇年アラム・カンリⅢ報告書)。これは弘前大学山岳部の元顧問である明石誠教授のことばだが、ヒマラヤを目指す集団として、荷物の軽量化、食事と栄養、装備の選択、高所医学と順応、気象学、登頂の戦術果てはヒルや感染症の対策まで、研究する課題は多かつた。それらを最新の情報をもとにやり尽くしても、遭難や事故はゼロにはならない。そうした現実を踏まえて万全を期し、その都度、総合的な判断をしなければならぬのが山であり、登山という活動だ。体育会系の山岳部は、じつは精神的というより科学信奉的であり、団体というより個を重視する集団なのである。



2014年の秋、澤木鶴匠の手のうえで羽を広げる「うみうのウッティー」。  
2015年春には鶴飼デビューを果たした



ペンライトで卵を透かした写真。  
卵のなかは透けている



卵内部に血管のようなものが見える

日本・京都府宇治市



### ウミウの卵を校卵してみました

今後の繁殖計画について話し合いをしているわたし(左)と松坂鶴匠(中央)、澤木鶴匠(右)。宇治川鶴飼の事務所にて

〇〇してみました世界のフィールド

## 「うみうのウッティー」 が教えてくれたこと

うだ しょうへい 民博 先端人類科学研究部  
卯田 宗平

ある調査地で身につけた知識や技術が、別の場所で必要とされることもある。それは、それぞれの場所が「地続き」であることのおかげでもあるだろう。

### ペンライトを握りしめ

これは、ある研究者のちょっとした技術が、フィールド先で思いがけず役に立った話である。

今から二年ほど前の二〇一四年六月二九日、宇治川鶴飼においてウミウのヒナが誕生した。のちに「うみうのウッティー」と名付けられ、鶴飼デビューを果たすこのヒナは、卵のなかで嘴打ちを繰り返して、およそ二日をかけて卵から出てきた。千年以上の歴史をもつ日本の鶴飼において、ウミウが人間に見守られながら誕生したという記録はない。翌日の新聞各社やネット上のニュースには「日本初、鶴飼のウミウ誕生」の文字が躍った。

「ウミウ誕生」の騒ぎから二日前の六月七日、わたしはペンライトを握りしめ宇治川鶴飼の事務所に向かっていた。その年に産まれた三つの卵を検卵するためである。日本の鶴飼では茨城県日立市十王町で捕獲された野生のウミウが利用されており、ウミウを人工の管理下で繁殖させた経験がない。そのため、鶴飼の現場では卵が有精卵かどうかを判断する技術がなかった。検卵で有精卵とわかれば育雛器や給餌道具などを準備する必要があった。検卵作業は次のステップを考えるうえで重要なのである。

じつは、中国で鶴飼の調査をしていたわたしは、江蘇省の漁師たちから検卵技術を教わっていた。自宅で鶴飼用のカワウを繁殖させる漁師たちは、産まれてきた卵を次々と検卵する。わたしはそんな漁師たちから伝授された技術をもって宇治市に向かったのである。

宇治川鶴飼の事務所に着いたわたしは、鶴匠たちから産卵の状況を聞いたあと、さっそく検卵作業を始めた。そして、孵卵器のなかにある三つの卵のなかのひとつをおもむろに指さし、「有精卵の可能性が高い」といった。それが、今



2014年に産み落とされた3つの卵

の「うみうのウッティー」である。

ここで「伝授された技術」と大げさなことをいったが、検卵の技術はシンプルである。それは、卵を暗いところに持っていき、ペンライトで透かし、卵黄や血管のようなものが確認できれば「有精卵」と判断するだけである。その日わたしは、事務所の裏にある倉庫に入り、ドアを閉め、真っ暗にしたうえで検卵をした。そして、ひとつの卵を有精卵と確認し、興奮しながら倉庫から出てきた。

### 再び、ペンライトを握りしめ

今から二年ほど前の二〇一五年四月二八日、わたしはペンライトを握りしめ再び宇治川鶴飼の事務所に向かっていた。その時点で産まれていた十一個の卵を検卵するためである。宇治川に着いたわたしは、昨年と同じ場所と同じように検卵をした。そして、「有精卵の可能性が高い」と判断した卵が後日、孵化した。ただ、この年は「無精卵」と判断したものが結果的には中止卵(胚の分裂が途中で止まった卵)であったり、産卵日から日数が経っていたためペンライトの光を透さない卵があったりした。また、鶴匠に同行して宇治市の動物病院に行き、そこで超音波を使った検卵(エコー検卵)も試みた。しかし、卵のなかのようすは不明瞭であった。検卵二年目は検卵の難しさを経験した。

中国で検卵技術を教わっていたとき、まさかこの技術が日本の鶴飼で利用できるとは思ってもしなかった。一般に、フィールド調査では世間であまり知られていないことを調べる。その過程で得る知識は、多くの人たちが経験したことのないものである。今回の場合は、そうした希少な知識が偶然、国境を越えて(少しだけ)役に立ったのである。フィールドでは予見なく何でも経験しておくことが重要である。そんなことを、「うみうのウッティー」は教えてくれる。

みんなくミュージアムパートナーズ  
「点字体験ワークショップ」  
日時 4月9日(土) 12時～15時30分  
会場 本館エントランスホール  
※申込不要、参加無料

みんなく春の遠征・校外学習事前見学&ガーデンズ  
春の遠征・校外学習にむけて、事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。学習に役立つツールの紹介や、見学に関するさまざまなご相談もお受けいたします。  
日時 4月7日(木)、4月8日(金)  
14時～16時30分(13時30分～16時受付)  
会場 本館第5セミナー室ほか  
お問い合わせ先  
ホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を記入の上、FAXにてお送りください。  
企画課 博物館事業係  
電話 06・6878・8210

特別展  
「東酋列像  
蝦夷地イメージをめぐる人物・世界」  
「東酋列像」は、1789年「クナシリ・メナシの戦い」で松前藩に協力したアイヌの有力者12人を描いた肖像画です。

本展示では、「東酋列像」を近世絵画史のなかでとらえるとともに、18世紀におけるアイヌの事情やアイヌ文化の背景に隠された中国やロシアを含めた北東アジアと蝦夷地の知られざる歴史・文化を明らかにします。



〔東酋列像〕イコトイ(フランスプザンソン美術考古博物館蔵)

会期 5月10日(火)まで  
会場 特別展示館

みんなくゼミナール

時間 13時30分～15時(13時開場)  
会場 本館講堂 定員 450名(当日先着順)  
参加費 無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)  
第455回 4月16日(土)

東酋列像を考える

講師 右代啓視(北海道博物館学芸主任)  
内田順子(国立歴史民俗博物館 准教授)  
日高真吾(本館 准教授)



世界「」の概要と、東酋列像が描かれるきっかけとなったクナシリ・メナシの戦い、フランスにおけるアイヌ文化の関心について実行委員メンバーがリレー形式で紹介し、東酋列像の歴史的・文化的な意義について考える。

みんなくウィークエンド・サロン  
研究者と話す

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」調査している地域(国)の最新情報「みんなく展示資料」について分かりやすくお話しします。4月からテーマによって実施時間が30～60分になりました。

4月3日(日) 14時30分～15時 アフリカ展示場  
「アフリカの」布はどこから来たか  
話者 三島禎子(本館 准教授)

4月10日(日) 14時30分～15時 ナビひろば  
スイスにおける高齢者のウェルビーイングと地域の癒し文化  
話者 鈴木七美(本館 教授)

4月17日(日) 14時30分～15時 ナビひろば  
兵士の写真は語りかける  
第二次エチオピア戦争のイタリア兵  
話者 川瀬慈(本館 助教)

4月24日(日) 14時30分～15時30分 特別展示館  
東酋列像をめぐる旅  
話者 日高真吾(本館 准教授)

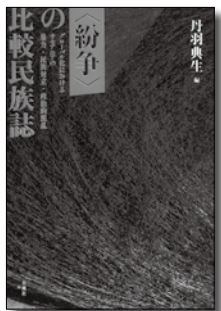
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

研究公演  
「黒森神楽X雄勝法印神楽inみんなく公演」  
岩手県の黒森神楽、宮城県の雄勝法印神楽の公演と、震災以前から現在にかけて両神楽の調査をおこなってきた研究者と神楽師によるパネルディスカッションを実施し、地域文化の重要性とその継承のあり方について考えます。  
日時 5月29日(日) 13時～16時  
(12時30分開場)  
会場 本館講堂  
締切 5月11日(水)まで  
※要事前申込、要展示観覧券

カレッジシアター  
「地球探究紀行」  
みんなく教員が執筆した臨川書店発行「フィールドワーク選書」を中心に話しします。

※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。  
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

丹羽典生 編  
『(紛争)の比較民族誌——グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』



春風社 3,700円(税抜)  
平和的な南太平洋という神話は、いつ、なぜ崩壊したのか。サモア、トンガ、フィジー、バブアニューギニア、ニュージーランドなど、オセアニアの政治的変動・諸問題を、詳細な事例研究により鋭く分析・考察。局所的に発現する身体的暴力から国際的な介入まで、争いを広く包括的にとらえてオセアニアの(紛争)に迫る。

刊行物紹介

橋本裕之、林勲男 編  
『災害文化の継承と創造』



災害からの復興過程において、地域文化はどのような役割を果たしてきたのか。東日本大震災発生から5年——「防災文化」に特化しがちであった災害にかかわる従来の文化研究の視野を拡張し、「災害文化」に対する新しい視座を提供する。17名の執筆者による、災害被災地での実践の試み。国立民族学博物館共同研究の成果を書籍化。

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716  
http://www.senri-f.or.jp/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 本館第5セミナー室(定員96名)  
※当日先着順、会員無料(会員証提示)、一般500円  
第454回 5月7日(土) 13時30分～15時30分  
第455回 6月4日(土) 13時30分～15時30分

「第87回民族学研修の旅開演」  
国境の地に生きる——フィンランド・カレリアとエストニア・セトウの人びと  
講師 庄司博史(本館 名誉教授)  
フィンランド東部・カレリア地方とエストニア東南部・セトウ地方にはともに国境によりロシア側と分断された人びとが住んでいます。双方ともロシアの長い支配下にあったため民俗文化や宗教にはロシアの強い影響を残す一方、辺境の地であったことからそれぞれの国ではすでに失われた文化も多く保持してきました。本講演では、今日、過疎化と多数派への同化の波のなかで地域にとどまり、伝統文化を守ろうとする人びとの姿を追います。

●講義終了後、講師を囲んで懇談会を実施します。  
第455回 6月4日(土) 13時30分～15時30分  
シンドバッド航海記の謎を追って  
講師 西尾哲夫(本館 教授)  
●講義終了後、講師を囲んで懇談会を実施します。  
東京講演会  
会場 モンベル渋谷店5Fサロン  
定員 60名(要事前申込、会員無料・一般500円)  
第115回 4月23日(土) 13時30分～15時30分

「第87回民族学研修の旅開演」  
国境の地に生きる——フィンランド・カレリアとエストニア・セトウの人びと  
講師 庄司博史(本館 名誉教授)

第87回民族学研修の旅  
フィンランドとエストニアの原風景に出会う  
森の恵みと唄を愛する人びとを訪ねて  
8月1日(日)～8月9日(火)  
両国の主要都市とともに、北カレリア地方(フィンランド)とセトウ地方(エストニア)を訪ねます。セトウ王国祭や各地の野外博物館を見学するほか、森を散策する時間もご用意しました。

●中央・北アジア及びアイヌの文化展示  
オープンの延期と本館展示場の一部閉鎖について  
2016年3月17日(木)に予定しておりました本館展示(中央・北アジア)及び「アイヌの文化」展示のオープンについて、3月3日(木)に発生した失火の消火の際に使用した消火剤の薬剤の微細粉末の除去のため、2016年6月16日(木)に延期いたします。

あわせて、本館展示場の一部朝鮮半島の文化、中国地域の文化、中央・北アジア、アイヌの文化、日本の文化展示を6月15日(水)まで閉鎖いたします。

●みんなくシャトルバスのご案内  
大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなくの間直通送迎バスを期間限定で運行します。  
運行日 5月10日(火)まで  
1日1往復、所要時間10分、無料  
休館日は運休します。

※万博記念公園でイベント開催の場合は臨時に運休することがあります。

●無料観覧日  
5月5日(祝) 本は、本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園(有料区域)を通行される場合は、入園料が必要です。

●みんなくミュージアムパートナーズ(MMP)新規メンバー募集  
みんなくミュージアムパートナーズは、みんなくの博物館活動をサポートするため自主的な企画を運営するボランティアグループです。この度9月から活動する新しい仲間を募集します。定員に達し次第、受付終了です。

応募期間 4月11日(月)～4月25日(月)  
お問い合わせ先  
みんなくミュージアムパートナーズ事務局  
平成28年度新規募集係(本館 社会連携室内)  
Email minpakutomo@senri-f.or.jp  
※みんなくホームページで詳細を確認の上、ご応募ください。



# 味の根っこ

ニュージーランド、マオリの石蒸し焼き料理

## ハーンギー

ふかやま なおこ 深山直子 首都大学東京准教授



3～5時間ほど待った後、食材に土がつかないように慎重に土・布をどけて引き上げる

### 石蒸し焼き料理「ハーンギー」

ニュージーランド人口の約一五パーセントを占める先住民マオリのソウル・フードといえ、まずはハーンギーまたはウムとよばれる石蒸し焼き料理が挙げられよう。石蒸し焼きは、焼石を熱源にして食材を長時間かけて地面に掘った穴で蒸し焼きにするという、オセアニアの広範囲で実践されてきた伝統的料理法である。マオリの祖先は東ポリネシアからやってきたが、彼らはこの地では土器を作らなかったこともあって、ハーンギーは食材に火をおす重要な方法であった。現在マオリは日常において鍋もオーブンも電子レンジも利用するが、葬式や誕生会、話し合いや懇親などといった目的でたくさん参加者が儀礼・集会場マラエに集う際には、「ハーンギーをしかける (put down a hāngī)」ことが一般的だ。それはハーンギーがマオリ固有の文化であると同時に、ヨーロッパ人が来島するようになって以降もたらされた食材を含めなんでも大量に一括して料理できるという特長をもつからに違いない。

### 墓石除幕式で「ハーンギーをしかける」

二〇一一年七月に「ハーンギーをしかける」場面に立ち会う機会があった。わたしは大都市オークランドの南部郊外に住むマオリ家族のところに居候しながらフィールドワークをしていたが、その家族の母が二〇〇六年に亡くなった。彼女の遺体は、都市に移入したマオリがしばし



たき火で石を熱する。被せられたかごは、焼石がはねることを防止しているのだらう



食材を布で覆った後、土を被せて蒸し焼きにする

ばそうであるように、北へ三〇〇キロほど行った故郷に連れて帰られ、帰属するマラエでの葬式の後に近くの墓地に埋葬された。その五年後に、墓石除幕式フラ・コーハトゥウが開かれた。彼女の子どもたちはかなり前から、故郷に住む親族と連絡を取り合いながら除幕式の計画を進めていたようである。儀礼・集会の主催者にとって、参加者に十分な食事を提供することは大切な義務なので、食材の入手や料理の段取りに関する話し合いは、直前まで綿密におこなわれた。

### 除幕式前日の昼前、故人の子どもたちはわたしやその他親族・友人とともにオークランドを出発し、夕方に故郷の地に到着した。そして近隣から集まった親族とともに、マラエの食堂の台所で明日のハーンギーのための下準備を始めた。誰もが手馴れた様子で、袋買いたした大量のジャガイモやサツマイモの皮をむいたり、吊るされた豚肉や羊肉の塊を切りわけたりしていく。当日は早朝から屈強な男たちが食堂横の露地で、「ハーンギーをしかける」作業を始めた。まず、薪を燃料とするたき火に、両手によやくのる程度の石をいくつもくべる。次に、数時間熱された焼石をコンクリートで塗り固められたハーンギー用の四角い穴の底に敷く。鉄かごに入れた肉や野菜をその上に置いて水分を含ませた布で覆い、さらに土を被せる。この間、女たちは副菜やデザートの下準備、テーブルセッティングを進めた。ごちそうの支度が整ったころ、教会で礼拝が始まり、その後墓地にて新しい墓

### 変化するハーンギー

このように、現代を生きるマオリにとってハーンギーは、儀礼・集会時の特別なごちそうである。その一方で、週末に各地で立つマーケットでは、ハーンギーを売る屋台が時に見られるし、オークランド南部郊外には近年、常設のハーンギー店も登場している。また最近では、地方自

治体から販売許可を得ぬまま、店舗も構えずにSNSを通じてハーンギーを売ろうとするひとがいて、自治体を取り締まりを強めているなどという話も聞いた。加えて、インターネットで検索すると、穴を掘ることなくハーンギーができるという金属製の大型調理器具を製造販売する会社が見つかる。ハーンギーは現代でも堅持されているマオリの食文化であることは確かだが、だからといって商業化を始めとする変化は無縁ではないのである。

石がお披露目され、続いてマラエであらためて故人を弔う時間となった。お昼過ぎにはハーンギーが引き上げられて、食堂で二〇〇人を超える参加者が好きなだけ自分の皿にそれを取りわけた。四、五時間かけて蒸し焼きされた肉や野菜は、柔らかくうまみが凝縮している。煙のフレーバーがアクセントとなって、調味料は僅かな塩だけでも十分においしい。



テーブル・セッティングが済み、ハーンギーの出来上りを待つ食堂

### ハーンギー (約100人分)

肉 (豚肉・鶏肉・羊肉)	① 薪と火山岩の石を集め、たき火で石を数時間熱する。
25キログラム	② 下準備を施した食材を、かごに入れる。その際に、食材ごとに布・葉・アルミホイルで覆うことが多い。
ジャガイモ 50個	③ 地面に掘り下げた穴に、焼石を敷き詰める。
サツマイモ 50個	④ 石の上にかごに入った食材を、肉、野菜の順番で置く。
ニンジン 50本	⑤ 食材を水分を十分に含ませた布で覆い、さらに蒸気が漏れないように土を被せる。
カボチャ 7個	⑥ 3～5時間ほど待った後、食材に土がつかないように慎重に土・布をどけて引き上げる。
※他に、魚・貝・牛肉、キャベツ・玉ねぎ、スチームブディングの生地などを料理することがある。また、香辛料に工夫を凝らす場合もある。	

# 海を越える「円楼」

かわい ひろなお  
河合 洋尚 民博 研究戦略センター

世界文化遺産の登録は、現地社会に大きな影響力をもちうる。それは時として空間を越え、他の国に暮らす同郷の人びとにもおよぶことがある。

## 客家のシンボルとしての円楼

中国福建省と広東省の省境には円形型の集合家屋が点在している。この伝統的な家屋は円形土楼、略して円楼とよばれる。円楼は、福建省西部の永定県、南靖県、広東省東部の饒平県などに分布しているが、なかでも永定県のそれが有名だ。この土楼の一部は二〇〇八年七月、ユネスコの世界文化遺産として登録された。

永定県は、客家とよばれる人びとが住む地域である。この地



福建省永定県の土楼群

域の円楼には客家が住んでいる。他方で、南靖県や饒平県の円楼には客家ばかりが住んでいるわけではない。だが、永定県の円楼の知名度が高いため、この家屋は客家文化のシンボルとして語られるようになっていく。

## コピーされる円形のシルエット

客家は、中国南部のみならず東南アジアなど世界各地に移住している。だが、円楼は、福建省と広東省の省境にしか分布しない局地的な建築であるため、大多数の客家地域には伝統的に存在していなかった。ところが、円楼が客家のシンボルとして認



広東省饒平県の円楼

識されるようになる。もともと円楼の文化圏ではない客家地域でも、円楼のシルエットを模した建築物が次々と建設されるようになった。

例えば、二〇〇八年以降、広東省の客家地域で円楼を模した建築物が増加し、四川省成都市の郊外では円楼型の博物館が建設された。さらに、円楼建設のブームは、海を越えて台湾や東

南アジアにも広がった。ここ五年のうちに、高雄、シンガポール、ジャカルタ、コタキナバル、ペナン島などで、円楼を模した近代建築が出現するようになっていく。

**団結の象徴か、葛藤の温床か**  
東南アジア諸国の客家地域を歩くなかでわかったのは、現地の人びとは、円楼を「団結の象

徴」としてとらえているという点である。彼らは、祖先が中国北方の中原から南方へと移住する道中で、外敵から身を守るためにつくられたのが円楼であると話す。それゆえ、円楼こそが客家の団結心を育んだ彼らのルーツであると信じているのである。だから、マレーシアの客家たちのあいだでは、近年、仲間ですべてを組んで、円楼を「聖

地巡礼」のごとく訪問することが流行している。

海を渡った客家は、現地社会では少数者になるため一層の団結が求められる。円楼は、そうした団結の象徴として重視されるようになっていく。しかしながら、円楼はあらたな「火種」をもたらすこともある。例えば、ペナン島では、円楼を模した建築物が建てられたとき、一部の客家住民が反対した。彼らは、今まで見たこともないデザイン、建築物が、自分たちの文化として語られるのに違和感をもったのだという。

円楼は、世界遺産の肩書きを得たことで、グローバルな広がりを見せている。だが、他方で彼らの生活や記憶に関する建築物が「文化遺産」として認識されず、破壊されている。遺産登録をめぐる影響は、地域を超えた問題としてもあらわれている。



台湾・高雄市の円楼型レストラン



マレーシア・コタキナバルにおける建設中の円楼型建築



# 余剰からうみだされる造形物 ——手芸について考える

上羽 陽子

民博文化資源研究センター



自らの花嫁衣装に刺繍をほどこすラバーリー女性。ラバーリー独特の意匠をみることができ

わたしたちは、さまざまな造形物をみたときに、直感的に「なにか」を感じとって、「手芸品」「あるいは「手芸っぽい」と判断していいのだろうか。では、その「なにか」とはいったいどういったものなのであろうか。

ある。また、手芸とは、手先の技術およびそれによる制作をさし、主として糸、布を用いてつくることの総称ともされている。そのため、現在でも手芸のつくり手の多くは、女性である。そして、趣味的な制作物であるため、近親者への贈り物として授受されることも多く、ときにはすぐに捨てられてしまうこともある。

手芸を芸術、美術、工芸と比較した場合、つくり手が女性ということ、素人がつくったものということから、少なからずネガティブなイメージがあることも明らかである。

### 手芸的な造形活動

では、日本以外の国に手芸的な造形活動はあるのだろうか。筆者は手仕事に息づいている村落を調査で訪れることが多いが、

ときに明らかにその土地に根ざしていない、手づくりの人形や置物をみてガツカリすることもある。また、お土産として、そういったものをもらったとき、使うことも飾ることもできずに、もてあましてしまった経験もじつはある。

このような造形物ほどのような経緯からうみだされるのであろうか。

ひとつは、近代化によって女性が家事労働から解放され、余暇や趣味といった時間をもったとき、それまでおこなっていた針仕事や、手先の仕事による技術を用いて、実用的ではないものがうみだされる可能性が高い。余剰的なものであるがゆえに、洗練された造形力や美的価値がともなっていないものが多くうみだされるのかもしれない。

### 有用？ 不要？

わたしが長年調査をおこなっている、インド西部カッチ州で暮らすラバーリーの女性たちも、近年になって盛んに余暇的造形物をつくっている。もともと彼女たちは、刺繍布で自分や家族などの衣装や調度品を制作してきた。貴重な糸や布を大事に使いながら、うみだされる刺繍布や衣装は、風土や民族性に支えられた意匠と技術に基づいており、確固とした造形力や美的センスに支えられている。

これまで女性たちは、家事や育児の合間のわずかな時間をみつければ、これらの手



これまではなかったプラスチック製ビーズによる飾りや、アクリル毛糸によるレター入れが右側にみえる。翌年には外されていた

仕事をしてきた。しかし、近年、井戸から水道の蛇口、薪からガスコンロといったように、生活形態が一変した。さらには、工場製の刺繍レースが市場で安価に入手することができるようになり、手刺繍にかわってそれらを衣装に縫い付けるなど、家事労働だけではなく、手仕事の省力化も進んでいる。

そういったなか、彼女たちは、町でプラスチック製のビーズなどを購入し、余暇的時間に、これまではなかった室内装飾品をつくるようになったのである。それらの造形物の特徴は、彼女たちがもっている造形力を十分に発揮したものとはお世辞にも言えず、まさに余剰のうえでの生産物であり、ときには不要品にさえもみえてしまう。それは、翌年、同じ家を再訪したときには、すでに飾っておらず、聞けば、「友人にあげた」「飽きたので捨てた」などと答えることから明白である。

では、そういったものは、何の役にも立たないのであろうか。手芸だからこそもつことのできる機能もあるはずである。

たとえば、手芸を媒介して形成される場というものがあ。高度な技術をもたず、誰でもできることから、趣味を介した人的ネットワークの形成や、癒しや精神安定としての効果があるのではないだろうか。さらに、手芸教室や手芸キット、手芸関連図



東京ドームで開催された第15回東京国際キルトフェスティバルの会場風景。手芸用品の出店がひしめきあっている

書が広く一般に普及していることや、素人でも容易に販売することのできる手づくり市やインターネット上での販売方法の広がりなど、その経済効果も無視できない。

このような余剰的・余暇的造形活動をどのようにとらえることができるのであろうか。また、わたしたちが「手芸品」あるいは「手芸っぽい」と判断してしまう特質とは、なんであるだろうか。

四月から始まったこの新コーナーでは、このような世界の手芸的造形活動の現状とそれらをうみだす社会制度に焦点をあてて事例を紹介する。身近な造形物への見方を再考する機会になればと考えている。

## 題名だって悩んで決めるし



## What's in a name?

 よしおか のぼる  
 吉岡 乾 民博 民族社会研究部

ことばの機能のひとつに、事物や概念に名前を与え、指し示すという働きがある。名前とは不思議なもので、対象それ自体とは直接何の関係もない符号なのに、それをそれとよぶ默契のあるコミュニケーションのなかで、その対象をあらわす為に使われるのだ。

人は何にでも名前を付けたがる。何に対して、どういう動機で名前を付けるか、或いは付けないか、名前に対してどういう態度を取るかなど、文化によってさまざまに違えど、少なくとも必要最低限、命名をするものだ。

異言語文化圏で生活をするとなると、名前が発音し難い、コミュニケーションに参入し易くなるなどの理由から、<sup>あだな</sup>綽名を与えられることが間々ある。調査地でわたしに綽名が付けられたとき、「お前の名は『gusunakis』だ」と言われた。ブルシャスキー語で「尻尾の奴」といった意味だ。当時、わたしは後ろ髪だけが長く、三つ編みにしたそれを「尻尾」と見ての名前である。但しこれは、自己紹介なら「わたしは『asunakis』だ」となるし、第三者に言わせれば「あつこは『sunakis』だ」となる。尻尾の持ち主が誰かに合わせて「尻尾」という語の語頭が変化するので、「尻尾の奴」も同様に、視点によって語形変化するのだ (gu·sunai·kis 「お前の・尻尾・的(な)」)。

名前に本質はない。かのシェイクスピアも、ジュリエットをしてそう言わしめた。

手でも、足でも、腕でも、面でも無い、人の身に附いた物ではない。(…)名が何ぢや? 薔薇の花は、他の名で呼んでも、同じやうに善い香がす

る。(第二幕第二場、坪内逍遙訳)

果たして本当にそうだろうか? 薔薇ではないが、ジャスマインの花の匂いを甘く嗅げるのは、ジャスマインが「薄ら大便臭の木」という名称ではないからではないだろうか。そんな名前の木の匂いでも、善い香だと好めただろうか。「ワンニャンハウス」なんて名の焼肉屋を開いて、客は見込めるだろうか。「サル」と名付けられた犬が居るだろうか。ロミオが「Windows Me」で、ジュリエットが「ペッペツペツ」という珍奇ネームだったとしても、「ロミオとジュリエット」改め「Windows Me」とペッペツペツ』はこんなに名を得ただろうか。

先の綽名は後々、後ろ髪を切つてからは使われなくなった。名は体をあらわす。尻尾がない奴を「尻尾の奴」とはよべない。調査地に通り始めて一〇年以上、すっかり名がとおつた今は、「ノボル」、或いは無個性に「日本人」、「博士さん」などとよばれるだけになったのが、少し寂しい。と、ここまで書きつつ急に思い出して頭痛がしたが、幼少期に家で飼っていた犬の名は「トド」だった。犬なのに。

ブルシャスキー語で語頭に所有者を示すのは、身体部位など、譲渡不能所有物に限つての話である。譲渡可能なものの語頭には付かない (un·haa 「お前の・家」)。では、名前は? 「名」という単語は、身体部位と同様、譲渡不能である (gu·ne 「お前の・名」)。トドの詰まり、名前はその指示対象の一部であり、持ち主とは切り離せないと考えられているのだ。名前の重要性はそう否定できたものではない。

## 編集後記

アメリカの大学にいた学部時代に、寮の女子に誘われ、何を血迷ったか、ラクロスของทีมに入ったことがある。大きすぎるユニフォームのミニスカートがずり落ちそうになるのを安全ピンで留め、他のプレイヤーのスティックで頭をたたき割られる心配のないポジションを維持しつつ、無駄にフィールドを走り回り、一学期で脱落した。組織的な「体育会」に手を染めたのは、後にも先にもこのときだけである。

さて、新年度を迎え、ふたつのコーナーを新設。ウィリアム・シェイクスピア没後400年と夏目漱石没後100年を記念して、というわけではないが、「ながなんちゃ」はシェイクスピアがジュリエットに「薔薇という花は、他の名でも……」と言わしめ、漱石先生が「名前はまだ無い」猫をもってして投げかけた、存在論的・認識論的・意味論的命題である。とはいえ、哲学的に深く考え込むのではなく、フィールドでの実体験などに基づいて「名付け」についてライトに考えてみる。

一方、「手芸考」はモノづくりについて考える新コーナー。そして考えてみれば、『月刊みんぱく』自体が手芸だ。デザインはもちろんプロにお願いしているが、内容は雑誌作りに関してはアマチュア研究者が企画している。この「手作り感」を大事にしつつ、新年度も編み続ける。(山中由里子)

### ●表紙、p2の写真提供

ボクシング：櫻永真佐夫、野球：窪田暁、空手：小林貴幸  
自転車競技：萩原卓也、アメリカンフットボール：瀬戸邦弘

## 次号の予告

特集

## たまり場

## 月刊みんぱく 2016年4月号

第40巻第4号通巻第463号 2016年4月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信

編集委員 山中由里子(編集長) 河合洋尚 菅瀬晶子  
丹羽典生 丸川雄三 南真木人 吉岡乾

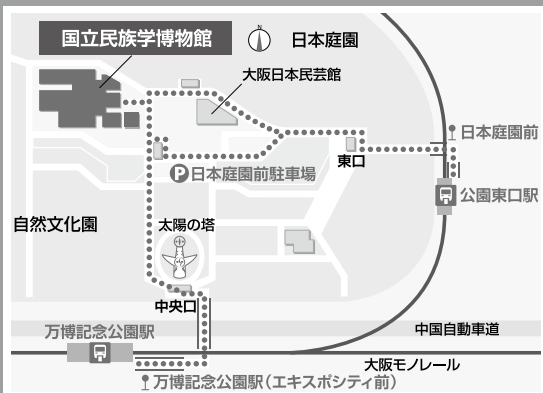
デザイン 宮谷一孝 長岡綾子

制作・協力 一般財団法人千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に  
お願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅(エキスポシティ前)」 「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんぱくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>

# みんなのほくぶつかん みんなぼく

MINPAKU



フィールドワーカーの「生」の声をお届けします。

「フィールドワーク選書」全20巻完結連動企画 各種イベントを大阪と東京で開催

現地におもむき、人びとと暮らしをともにしながら調査をおこなうフィールドワーク。人類学だけでなく、いまや他の学問領域でも欠かせない手法となりつつあります。そんなフィールドワークについて、みんなぼくの研究者が著したシリーズ「フィールドワーク選書」全20巻(臨川書店)が、このたび完結しました。

このシリーズには、20人の研究者がおこなったフィールドワークの一部始終が描かれ、そこで得られた知見がどのように研究として形を成していくのかがつまびらかになります。そして、研究論文ではこぼれおちてしまうような、出会いや葛藤、予想外の展開など、等身大の人として現地の人びとに向き合う姿も語られています。

「フィールドワーク選書」全巻刊行に連動して、著者のトークイベントや関連書籍フェアが、大阪と東京で開催されます。書籍に加えて執筆者のトークで、フィールドワークの醍醐味を味わってみませんか。



フィリス島に伝わる外来の土器。『南太平洋のサンゴ島を掘る』より(撮影・印東道子)



スイカ鍋。『人間にとってスイカとは何か』より(撮影・池谷和信)

## 【大阪】

### ■連続講座「カレッジシアター 地球探究紀行」

会場 あべのハルクス近鉄ウイング館9F「スペース9」  
開催時間 13:00～14:30(参加費1,000円/要事前申込)

4/13(水) 飯田卓	4/27(水) 上羽陽子
5/11(水) 岸上伸啓	5/25(水) 西尾哲夫
6/8(水) 池谷和信	6/22(水) 吉田憲司
7/13(水) 朝倉敏夫	7/27(水) 宇田川妙子
9/14(水) 寺田吉孝	9/28(水) 韓敏

主催 産経新聞社 共催 近鉄文化サロン、スペース9

### ■みんなぼくブックフェア&トークイベント

会場 ジュンク堂書店大阪本店3F  
期間 5/9(月)～7/10(日)

〈トークイベント〉

日時 5/20(金)19:00～  
(1時間程度、18時半より会場受付/無料)  
関雄二×印東道子×白川千尋(編集委員)  
主催 ジュンク堂書店大阪本店

## 【東京】

### ■連続講座「素顔の地球に出会う ——人類学者たちのフィールドワーク」

会場 モンベル渋谷店5Fサロン  
開催時間 13:30～15:30  
(参加費 国立民族学博物館友の会会員:無料/一般:1,000円)

6/11(土) 印東道子	9/10(土) 池谷和信
11/12(土) 佐々木史郎	

主催 千里文化財団

### ■みんなぼくブックフェア&トークイベント

会場 三省堂書店神保町本店  
期間 7/20(水)～8/31(水)  
主催 三省堂書店神保町本店

※会期中、執筆者によるトークイベントも予定しております。

申込方法等詳細は『月刊みんなぼく』、みんなぼくホームページなどで随時ご案内します。

## みんなぼくをもっと楽しみたい人のために—————会員制度のご案内

詳細については、「国立民族学博物館友の会(一般財団法人千里文化財団)」までお問い合わせください。

電話06-6877-8893(平日9:00～17:00)

### 国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんなぼく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

### みんなぼくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます(特別展示は観覧料割引)。他にも、みんなぼくを楽しむための特典がいっぱいです。

### 国立民族学博物館

#### キャンパスメンバーズ

みんなぼくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。